

岩槻城跡を探る

第1調査室 立地と概要

調査レポート① 岩槻城築城伝説

「白鶴城」・「浮城」・「竹束城」。これらは岩槻城の別称・美称といわれています。そのうちの「浮城」は、三方を沼地に取り囲まれた岩槻城主郭部の景観を水面に浮かぶが如し、ととらえたことから生まれた呼び方であろうと想像がつかますが、他の二つはどのような由来があるのでしょうか。

実は、「浮城」も含めた三つとも、岩槻城築城をめぐる伝説にちなんでいるといわれています。

その伝説とは、沼地に築城しようと苦慮していた太田道灌が、水面に浮かべた枝にとまって羽根を休める白鶴の様子にヒントを得て、竹束を使うことで沼を埋め立てることに成功し、見事岩槻城を築城した、というものです。その情景が目に見え、いかにも「さもありなん」と思えてきます。これも「浮城」と同じく、岩槻城主郭部の立地と地形的特質と深く関わっているわけです。

こうした伝説は、地域に伝えられた「記憶」として、尊重すべきものです。しかし同時に、歴史的事実として取り扱うには慎重を要するのも実情です。地域の「記憶」はときに上書きされ、新たな装いをまとって語り直されることがままあります。特に、江戸時代中期以降、地域の中でも文化活動がさかんになると、学習の成果が反映されて、新たな物語が描き出され、それが地域の「記憶」として定着する場合もありました。

この伝説が歴史的事実かどうかを問うことは、あまり生産的なことではありません。しかし、これがどのように伝えられ、どのように受け止められてきたのかは、大事なことです。歴史的事実とは少し異なる伝説の世界を深掘りしてみましよう。

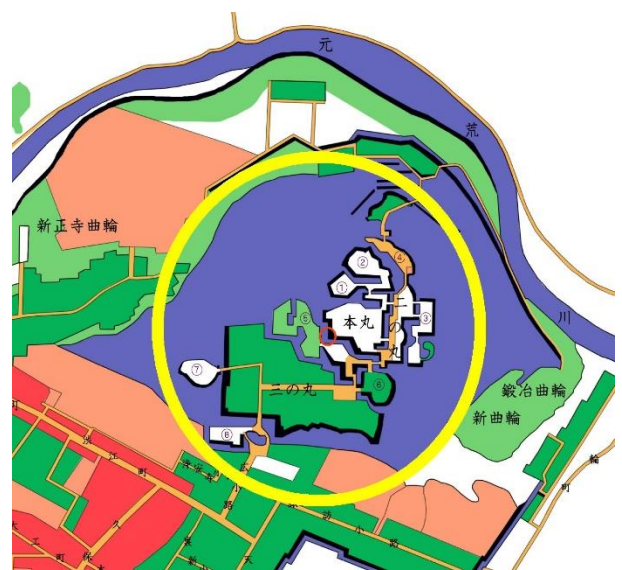


図1 水面に浮かぶが如き主郭部

伝承 - 『老談岩槻軍記』の世界から -

まず、この築城伝説がどのように伝えられてきたのかを確認しましょう。

『岩槻巷談』という書物があります。江戸時代後期に岩槻城周辺地域において著された軍記物語です。その中に岩槻城築城のことを述べた一節があります。

然るに三吉野の城地の外に四神相応の地を求めて城を築かばやと思へければ、所々を歴覽するに岩槻の地は東に元荒川といふ大川有り、西は奥羽へ下る大道あり、南は数万頃の田野ひらけ北は数十里の原野也。是則青龍・白虎・朱雀・玄武の地に叶ひ、乾坤・破軍・六花陣兼て備り是窟竟の地なり、此所に城郭を取立なは万代不易の名城にも成べくと工夫を凝しけれども、大なる沼ありて廻りは深田なれば是を埋めん事思案にあたはず、又々他日巡見して熟考る折から一双の丹頂ありて何国ともなく飛来りて此沼に羽を休に枯枝を銜へて来て足溜りとして休みける、道灌は是をきつと見て横手を打ていふようは、昔菅仲は老馬をかりて胡国へ帰る事を知り、隰朋は蟻壤を見て水ある事を知りて諸軍の渴を救ふといへり。今我此所に城を築んと思ふに白鶴の瑞有、此鶴に習ふて此大沼を埋め立んと、俄に数千人の人夫を集て山林の竹木を数多伐り出し、数万艘の筏を組立て此沼へ押おろし土を運せければ、日あらずして平地となる。去らば縄張をせんとして頃は長祿元年四月十五日より普請に取かゝり、兵学の奥儀に依て追手・搦手・武者出しの虎口、馬の駈引の場、本丸・二ノ丸、三ノ丸・外郭に至る迄残る処なく縄張出来し、夫より夜を日に繼て普請に取かゝりければ城の造営堅固に出来す。依て白鶴の吉瑞ありしかば白鶴の城と号し、又は一名には竹束の城ともいふ。抑此城は霖雨洪水の時より荒川どのように満水するとも或は城下の村民水に溺るゝ事あるとも城中に曾て水に愁ふる事なし。依て俗によんで浮城といふ。道灌是に居城して上杉家を補佐しけるといふ。

(『岩槻巷談』巻之上「太田家由緒并に道灌名誉の事」。文献1)

※一部濁点と句読点を整理しましたが、送り仮名、旧仮名遣い、誤字等はそのまま引用してあります。

長い引用となりましたが、ここには、太田道灌が鶴のしぐさから沼地を造成する工法を着想し、そこから「白鶴の城」「竹束の城」「浮城」という呼び名が生まれたと記されています。これは先ほどの物語そのものです。岩槻城築城伝説は、『岩槻巷談』によって伝えられたと、ひとまず理解してよいでしょう。

『岩槻巷談』は1929年(昭和4年)に稲村坦元・柴田常恵両氏によって埼玉県 of 歴史に関わる史料集である『埼玉叢書』(さいたまそうしょ)が編さん・刊行された際、その第二巻に収められたことによって広く知られるようになりました。その際に底本(ていほん。文献などを活字に翻刻したりする際に元にしたもの)とされたのは、旧岩槻藩士の田口義富氏所蔵の写本でした。江戸時代までの著作物は、木版刷りで印刷される場合もありましたが、多くは人の手で書き写されて広まりました。『埼玉叢書』が元にしたものもそうした写本の一

つでした。

本を書き写す際には、誤字や脱字などの写し誤りが生じやすいもの。加えて、書き写す過程で、新たなエピソードが加えられたり、その反対にエピソードが削られたりすることもありました。そうしたことを繰り返すうちに、内容の異なるいくつかの作品群が生まれていくこととなります。そうしたものを「異本（いほん）」と言いますが、『岩槻巷談』にも異本があり（文献2・3・4）、いくつかの写本も知られています。ここでは、代表的なものとして、3つのテキストを挙げておきます。

- ①『老談岩槻軍記』 蓮田市閨戸齋藤氏蔵本 全3巻 『蓮田市文化叢書』第51巻にて翻刻（文献5）
- ②『老談岩槻軍記』 国立国会図書館所蔵・青山根岸家文庫本 全3巻 国立国会図書館デジタルアーカイブ
※巻一の巻首に天保15年（1844）までの年数の記載あり
- ③『老談岩槻聞記』 個人所蔵 全3巻
※上巻末尾に安政6年（1859）2月の書写奥書あり

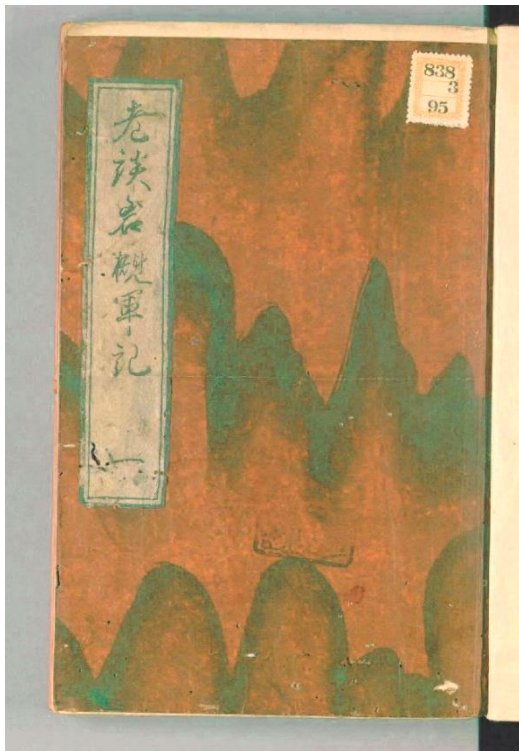


図2 青山文庫本『老談岩槻軍記 一』表紙
※国立国会図書館デジタルアーカイブ

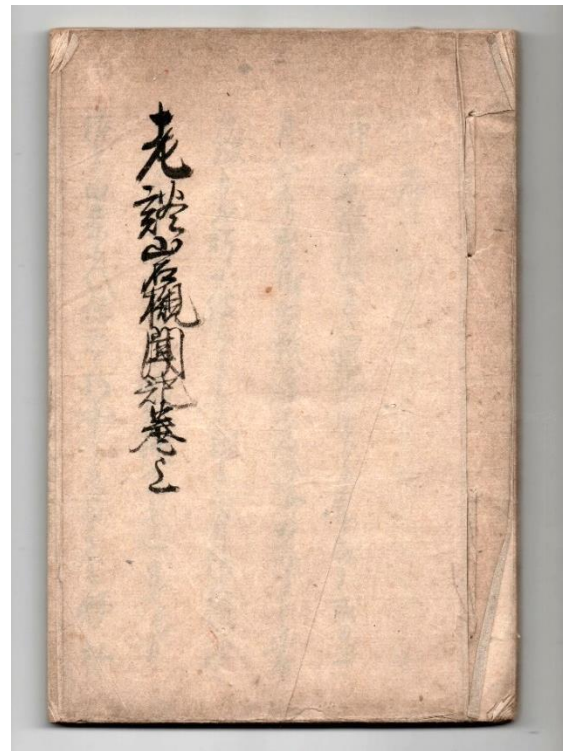


図3 個人蔵『老談岩槻聞記 卷上』表紙

②の内部には、書名をア「老談岩槻聞書」とするところと、イ「岩槻治乱記」とするところもあります。書名が表紙と中身とで微妙に異なることはま見られますが、「老談岩槻軍記」という書名が成立する以前に、アやイのような書名の写本が流布していた可能性もあります。ちなみに、アは③と共通します。これらは、それぞれ異なるところ（「異同（いどう）」といいます）があります。最も大きな異同は、③には、岩槻城の近くに寓居する筆者のもとを訪れた老人の語るところを記した旨の序があることです。けれども、大きな構成としては、三

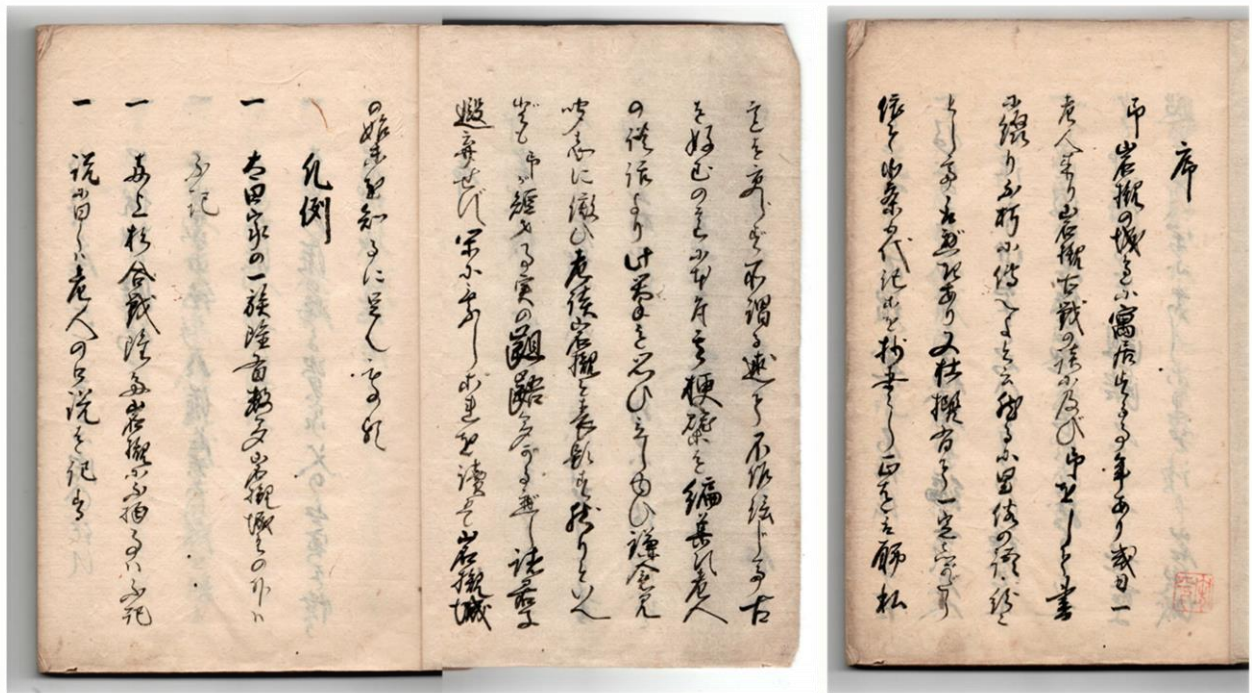


図4 『老談岩槻聞書』序（巻之上）

つはほぼ同一で、同じグループにまとめることができます。反対に、『岩槻巷談』とは異なつたところがたくさんあります。詳しいことは省きますが、作品としての成り立ちを考えると、①～③の『老談岩槻軍記』『老談岩槻聞記』が先に成立し、それを大幅に改作したのが『岩槻巷談』だといえそうです。そうだとすると、岩槻城築城伝説は、まずは『老談岩槻軍記』によって伝えられた、このように言い換えておいた方がよいでしょう。

この伝説がいつ生まれたのかは、詳しくはわかっていません。それを伝えた『老談岩槻軍記』の中で、判明する書写時期が最も古いと思われる国会図書館所蔵の青山文庫本『老談岩槻軍記』は天保15年の年号が冒頭部に記されていますから、1844年（天保15年）かそれ以降の写本であることがわかります。この作品群の成立年代に関わる情報で公開されているものは、今のところこれが最古です。

三つの別名については、この作品群以外には江戸時代の所見は乏しいのですが、唯一「竹束城」が1832年（天保3年）頃作成の岩槻城主リストに記されている例があります。このリストは、1828年（文政11年）に書写された「村々申渡留帳」という記録に、1832年頃に様々な情報が追記されたもので、岩槻城主のリストが2種類、収められています（中村家文書、文献6）。一つは、1590年（天正18年）の岩槻城落城以来の城主のリスト（「城主リスト①」と仮称します）、もう一つは築城から1590年の落城までの城主のリスト（「城主リスト②」と仮称します）です。

注目されるのは、それぞれに付された標題です。①には「岩築竹束之城」、②には「岩槻竹束城曰」とあります。白鶴や竹木を重要なモチーフとする築城伝説が誕生した時期の下限を、わずかに12年だけですが、青山文庫本『老談岩槻軍記』からさかのぼらせることができます。

ところで、この「村々申渡留帳」に収められた城主リスト②には、興味深い点があります。それは、そこに列挙された戦国時代の歴代岩槻城主は、『老談岩槻軍記』に登場する岩槻城主歴代と一致していることです。『老談岩槻軍記』の記述を基にしてこのリストが作成されたか、あるいはその逆に、こうした地域に伝わる伝承にもとづいて『老談岩槻軍記』の記述が生み出されたか、これらのいずれかですが、両者の一致の度合いが高いことを踏まえると、前者の可能性が高いと考えられます。

その一方で、これらの史料群よりも半世紀以上前の江戸時代中期、岩槻城周辺地域では、また別の歴代岩槻城主リストが普及していました。この点を表1（次ページ）によりながら説明しましょう。

表1では、城主リスト①を左欄に、江戸時代中期に普及していた歴代岩槻城主リストを右欄に掲げました。右欄の城主リストは、1695年（元禄8年）に原形が成立し、1756年（宝暦6年）の岩槻城主交代（永井氏→大岡氏）の際に加筆・修正されたものです（「武州岩附城主古来之次第」、文献7）。これは、岩槻城下町富士宿町の名主家が作成したものです。これとほぼ同内容の城主リストは、同じく城下町市宿町の名主家も作成していました。こちらは、1720年（享保5年）の火災で原本が焼失してしまったといえますから、元の内容は1720年以前に作成されていたことがわかります（「岩槻城主覚書」、文献8）。

江戸時代後期の城主リスト②（左欄）と中期のリスト（右欄）を対比してみましょう。実名（じつみょう。名前のこと）に絞ってみれば、二代目の「資家」と「康資」の違いがある

表1 岩槻城周辺地域に伝えられた歴代岩槻城主

| 「村々申渡留帳」城主リスト② | | | | 宝暦6年「岩槻城主古来方之次第書」 | |
|----------------|--------------|------------|-----------------|-------------------|----------------------------------|
| 城主 | 名前 | 没年 | 法名 | 名前 | 備考 |
| 一(道灌父) | 太田左衛門太夫資清 | 応仁元年2月2日 | 自得院殿実慶道真大居士 | | |
| 1 | 太田備中守持資入道道灌 | 文明18年 | 香月院殿春苑道灌大居士 | 太田道灌俗名備中守持資 | 小田原元祖宗雲の介入により江戸居城で切腹 |
| 2 | 太田信濃守資家 | 大永1 | 養竹院殿義(芳脱か)道永大居士 | 太田源五郎康資 | 上杉殿赦免により岩附拝領 |
| 3 | 太田大和守資高 | 永禄11年8月23日 | 太田宗(崇か)院殿昌安道也 | 太田三楽斎俗名資高 | 岩付を子息に譲り、岩淵の上に新城を築き隠居 |
| 4 | 太田美濃守資朝入道三楽斎 | 天正10 | 寿仙院殿智楽道可大居士 | 太田信濃守資朝俗名源五郎 | 資高子息。永禄7年正月8日下総国高之台合戦で敗北、岩付帰城後浪人 |
| 5 | 太田大膳太夫源十郎氏房 | | | 太田十郎氏房 | 北条氏直舎弟、小田原にて切腹 |

※城主リスト②の太字は、『老談岩槻軍記』と共通する記載

だけに過ぎませんが、通称等まで含めると齋号「三楽斎」を「資高」とするか、「資朝」とするかという違いもあります。どちらも、いわゆる「江戸太田氏」(江戸城を拠点とした太田氏の門流)と「岩付太田氏」(岩槻城を拠点とした太田氏の門流)を混同しています。

歴史的事実としては、「三楽斎」を名乗ったのは資正。岩槻城主太田氏歴代の中では最も著名な人物ですから、この名乗りを誰に充てるかという違いは、小さなことではありません。二代目城主の違いとあわせて、両者の間の違いには大きなものがあります。岩槻城周辺地域に伝承された戦国時代岩槻城主歴代観は、江戸時代中期から後期に至る間に大きく変容していたのです。

この変容がなぜ生じたのかを確実な史料に基づいて明らかにすることは、現時点では困難ですが、江戸時代中期以降に盛んになる地域の歴史研究や文芸活動の影響を想定してみると有効でしょう。その場合、そこに最も大きな影響を及ぼしたのがほかならぬ『老談岩槻軍記』であった可能性があります。『老談岩槻軍記』は、江戸時代中期の岩槻城主リストのような地域に伝わる歴史像を踏まえながら、江戸時代中期以降活発となり、かつ著作の刊行などによって広く普及した歴史研究の成果を摂取して、地域の中で創作された物語です。『老談岩槻軍記』は印刷・刊行されるには至りませんでした。各地に写本が残り、異本も生み出されたことから、広く流布したと考えられます。この作品が地域社会に受容されることで、そこで提示された岩槻城主の変遷は、それまでの岩槻城主リストに上書きされていったのではないのでしょうか。

このように考えると、「『老談岩槻軍記』が岩槻城築城伝説を伝えた」という見方には、修正の余地が生じます。『老談岩槻軍記』と岩槻城築城伝説との関係は、「伝えた」というニュートラルな立場ではなく、「創った」という、伝説創成の第一当事者であった可能性が浮かび

上がってくるのです。

『老談岩槻軍記』が綴る物語の大半は、『関八州古戦録』の切り貼りです。『関八州古戦録』は1726年(享保11年)に国学者の榎島昭武(まきしまあきたけ)が著した軍記物です。1545年(天文14年)から1590年(天正18年)の小田原北条氏の滅亡までの関東の政治史を描いています(文献9・10)。関東全体を俯瞰できることなど、当時としては関東戦国史に関する画期的な著作でした。このため、幕府や大名家の蔵書として広く流布するとともに、各地の歴史探究においても受容されました。『老談岩槻軍記』が『関八州古戦録』を切り貼りしているということは、地域における同書受容の具体的なあらわれといえることができます。

但し、『老談岩槻軍記』は『関八州古戦録』の切り貼りだけで構成されているわけではありません。他には見られない独自の記事もたくさんあります。最も顕著なものは、「伝に曰く(伝にいわく)」という記述です。コラムのように、本文の展開から切り離れた形で、後日譚や登場人物の末裔などを紹介しています。これが作者の独自の取材に基づいて盛り込まれた記述であることは明らかです。

「伝に曰く」以外の本文でも、他の書物には見られないオリジナルの記述があります。少し具体例に即して説明しましょう。巻之中に「太田三楽斎隠居之事」という章段があります。そこでは、岩槻城を追われ下野国(栃木県)に流浪していた太田資朝が岩槻城奪回の執着を捨て、太田の名跡と先祖伝来の重宝を北条氏房に譲り、自らは城下の加倉村で仏道修行に専心したことが描かれています。岩槻城奪回の執着を捨てた資朝の仏のもとでの安寧、関東の覇者と常に対峙し続けた太田家の北条家への最終的な帰服。物語の構図が大きく転回します。

ところが、歴史的事実と対比してみると、ここには大きな齟齬があります。北条家への徹底抗戦を譲らず、岩槻城から放逐されたのは資正。資朝ではありません。資正が岩槻城に残った親資正派の家臣と連携して、岩槻城奪回を目指して岩槻領に侵入したことは確かな事実ですが、同調者の裏切りによって岩槻城奪回は果たせませんでした。資正はやがて出家して三楽斎道誉を称しますが、常陸国の雄・佐竹氏に身を寄せながら、越後上杉氏や織田信長、豊臣秀吉らとさかんに通交して、関東における北条氏の覇権阻止に粉骨しました。したがって、資正が加倉村で仏道修行の余生を送った事実はありません。

資朝=資正とする理解は、資正の嫡男・氏資ゆかりの寺、岩槻城下市宿町の芳林寺にある太田氏歴世位牌の中に「六世美濃守資朝、後資正入道三楽斎道誉」とあるのが数少ない事例です(表2、文献11)。この位牌は、幕末期に日光

表2 芳林寺「太田氏歴世位牌」の太田氏歴代

| 名前 | 法名 |
|------------|-----------------------|
| 太田左衛門尉資清 | 自得院殿寛慶道真大居士 |
| 二世左衛門大夫持資 | 香月院殿春苑道灌大居士 |
| 三世信濃守資家 | 養竹院殿義芳道永大居士 |
| 四世美濃守資頼 | 寿仙院殿知楽道可大居士 |
| 五世信濃守資時 | 朝照院殿法光道義大居士 |
| 六世美濃守資朝後資正 | 智正院殿岳雲道瑞大居士 ※洞雲寺開基 |
| 七世源五郎氏資 | 大崇院殿昌安道也大居士 |

道中粕壁宿（春日部市）の宿名主を務め、明治初期にかけて粕壁地域の歴史考証なども行った関根（多田）孝純が寄進したものです。彼が著した粕壁の地誌『春日部記草』（文献12）には、標題に「春日部記草 太田家記／岩月老談 別冊」とあって、明らかに『老談岩槻軍記』を知っていましたから、資朝＝資正とする点は資正を洞雲寺開基としている点とともに、その影響かもしれません。しかし、それ以外では『老談岩槻軍記』や表1に掲げた岩槻城周辺地域の伝承からは決別しています。

はじめにも述べておいたように、『老談岩槻軍記』の記載内容がいかに史実と乖離しているかをあげつらうことはさして意味のあることではありません。むしろ、ある程度史実を踏まえながらも、正確な歴史の描写とは異なる目的がそこにはあると考えるのが穏当でしょう。先ほど、『老談岩槻軍記』は『関八州古戦録』を切り貼りしていると述べましたが、切り貼り部分は、実は単純な“コピペ”ではありません。貼り付けた『関八州古戦録』の記事に登場する岩槻勢の人物を別の人物に置き換えているのです。そして、その操作が行われたのは、「伝に曰く」において末裔たちの現状－作者の生きる時代における－が特記される人々です。言い換えると、それらの人々の祖先は太田家の家臣として関東戦国史において活躍していたことを描き出しているのです。どうやら、正確な事実には拘泥しない、戦国時代に舞台を借りて創り上げられた一つの世界、それが『老談岩槻軍記』だといえそうです。その世界は歴史叙述ではなく、文芸の世界といってよいでしょう。

このようにみてくると、『老談岩槻軍記』に記された岩槻城の三つの別名の由来も、伝説の記録化、口頭で伝えられた伝承の文字化としてではなく、この物語において創り上げられた新しいストーリーであったように思えてきます。くわえた枝を使って鳥が何事かをなす様は、たとえば『淮南子（えなんじ）』「脩務訓」における、鴈（がん）が蘆（あし）をくわえて飛ぶことでワナを避ける逸話があります（文献13。なお、『淮南子』は有名な「人間万事塞翁が馬」の故事を伝えた、古代中国の教訓書）。教養人で、歴史書や漢学の素養もある作者にとって、そうした知識を駆使してエピソードを練り上げるのは容易なことだったのではないのでしょうか。

展開と回帰 — 近代的言説と検証 —

この築城「伝説」の主要なモチーフの一つは、沼地の埋立てです。普通に土砂を投入するだけでは強固な地盤を得られない、深淵かつ広大な沼地。竹や木を束ねた上に土砂を投入することで、築城にかなう盤石な地盤を造成した、というものです。

この話は、明治時代後期から地域の歴史や文物への関心が高まる中で、岩槻城築城に関わる逸話として取り上げられ、繰り返し叙述されました。例えば、明治末期から昭和にかけて地域に伝わる史料を記録化しつつ、岩槻城を中心とする地域史研究の基礎を築いた島田午蔵（島田浮城・田中午比古）は、1915年（大正4年）に刊行した著書『岩槻誌』の末尾に「白鶴城物語稿（しらつるじょうものがたりこう）」を掲載して、岩槻城の歴史を物語として描き出しました（文献14）。その中で島田は、この話を大きく取り上げた上で、次のように評しています（適宜、漢字を現行のものに改め、句読点を整理して引用します）。

鉄瓶の湯気から、蒸気機関が発明された。些細の動機から人間の怪しき靈妙不測の智ははたらき出して、大事業をさせるものだ。持資は此動機を鳥に得た。

産業革命の母体となった蒸気機関の発明にもなぞらえられて、近代的装いをまとい、この話は地域における定着の度合いを増していきました。

その一方で、確実な史料に基づく歴史の記述が重視されるようになると、この話の取扱いにも変化がみられるようになります。上で紹介した、他ならぬ島田午蔵自身、著書『岩槻誌』の本編において岩槻城の歴史を叙述したところでは、この話には一言も触れず、歴史物語として紡いだ「白鶴城物語」の中で取り扱っていることが、それを端的に表しています。その後、1957年（昭和32年）に「岩槻城築城500年」を記念して岩槻城鍛冶曲輪跡に建立された「白鶴城記念碑」（図5・6。『岩槻市史 金石史料編Ⅱ』（文献15）に銘文が翻刻されています）では、2羽の丹頂鶴が沼に舞い降りたことを吉兆ととらえて築城した、の銘文が刻まれています。話の筋立てが大きく書き換えられています。



図5 築城500年記念「白鶴城址碑」（左）と「白鶴城記念碑」（右）
岩槻城址公園（鍛冶曲輪跡）

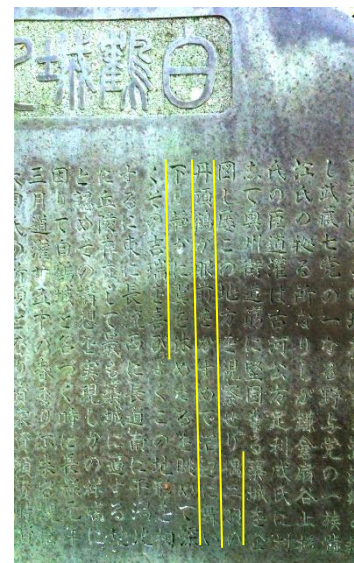


図6 「白鶴城記念碑」の銘文
※傍線部に伝説が刻まれる

そして、1960年代以降、史料を収集して、史料に基づいて地域の歴史を解き明かす取組がさかんになりました。さいたま市域でも、有志による研究活動や高校の部活動による調査研究などが始まりました（その一端は、「第4調査室 発掘調査」の調査レポート①「岩槻城跡発掘調査事始め」で紹介してあります」。さらに、市町村単位で自治体史編さん事業も開始され、組織的・体系的に地域の歴史の解明が進められました。こうした動向の中で、『岩槻巷談』には虚構や錯誤が著しく、史料的价值は極めて低いことが指摘され、史料を踏まえた歴史叙述の中では、この話はほとんど取り上げられなくなりました。

そうした動向のもと、岩槻城の膝元の岩槻市史編さん事業においては、専門家による編さん体制を整える前に、事務局主体で編集・刊行した報告書の中で、岩槻城二の丸跡付近でのボーリング調査による土層柱状図を使って岩槻城が関東ローム層の台地上に立地していることを示しつつ、「伝説によると埋立てにより城が築かれたとされているが、そのような場所は見当たらない。」と述べています（「太田氏と岩槻城について」、文献16）。触れる価値もない挿話として何ら言及しないのではなく、客観的データを示して歴史的事実を確定させようとする、科学的精神の発露なのか、地域に密着した編さん事務局がこの伝説の実否に論及するには慎重を要したのか、このあたりの事情は定かではありませんが、その時代の土木技術の粋を集めて構築される拠点城郭の成立史を総合的に解明しようという目的意識をもった場合、データに基づく検証は避けては通れないことではあったのでしょうか。

その後、岩槻城跡の発掘調査が繰り返し行われるようになり、主郭部でも新曲輪部分でも、さらには新正寺曲輪でも、大半の調査地点で関東ローム層を基盤として岩槻城が築城されたことが確認されています。沼地を大規模に埋め立てて城が築かれた、というのは、その立地と景観から連想された、想像の産物だったことはもはや疑う余地はありません。

但し、大規模な地盤の造成が全くの事実無根かといえば、必ずしもそうではありません。主郭部では随所で盛土整地層が検出されており、城の改修を行う際には、大規模な造成工事もセットで行われていたことが明らかになっています。本丸の北に位置する御茶屋曲輪では、十数回の盛土整地の跡が検出されており、累積した盛土整地層の厚さは、築城段階の地表面上1m50cm以上ありました（文献17）。新曲輪部分でも、沖積地に向って緩やかに傾斜する斜面に大規模な盛土を行って平坦な曲輪を造り出していました（第6調査室「南の備え 新

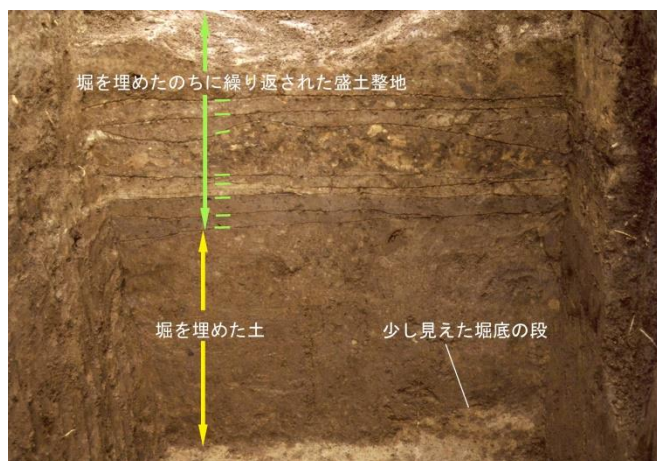


図7 御茶屋曲輪跡第1地点の盛土整地層①



図8 御茶屋曲輪跡第1地点の盛土整地層②

曲輪」の調査レポート②「鍛冶曲輪の構え」で紹介してあります)。さらに、実際に沼地を埋め立てた跡も一部見つかっています。主郭部・二の丸に附属する曲輪・竹沢曲輪の造成です。

竹沢曲輪は、二の丸の東にある曲輪です。周辺の開発が大きく進むまで、曲輪内の平地は標高11.1mほどで、二の丸内と比較すると、2mほど低くなっていました。ここでは、発掘調査が2回行われていて、曲輪内の様相がある程度把握されています(図10)。曲輪の平地の大部分は、東側の沖積地に向かう斜面を平坦に削平して造成されていましたが、一部、沼を埋め立てて曲輪を造成したところがありました(第1地点A区、文献18)。そ

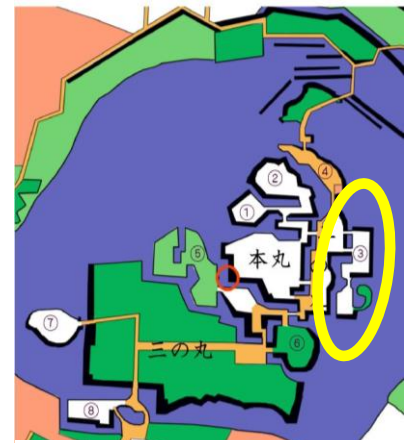


図9 竹沢曲輪の位置

こは湿地性の植物が生い茂る沼地で、下層には枯れた植物が水中に沈んで累積した泥炭層(でいたんそう)が形成されていました。15世紀の後半頃、そこに盛土を行って平地が形成され、その縁辺には水堀が廻らされました。ここでは、堀際の護岸や防御に用いたと思われる杭列や北側に通じる橋脚跡などは見つかりましたが、竹や木を組んだ埋立て工事の痕跡は認められませんでした。以後、盛土を繰り返しながらこの基本形が維持され、16世紀の後半

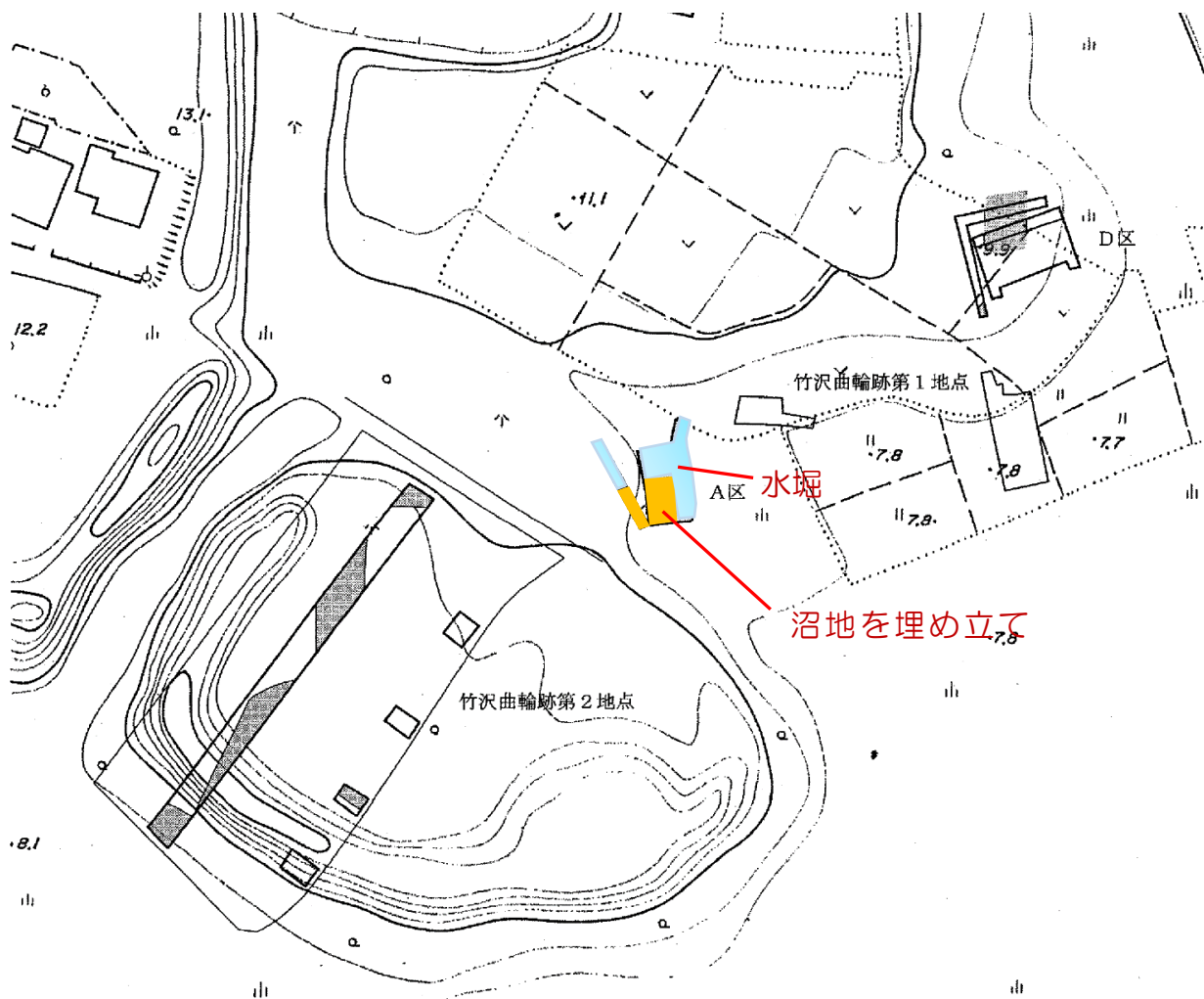


図10 竹沢曲輪跡第1地点A区的位置と曲輪造成 ※文献16掲載図に加筆

頃、曲輪の大改造が行われ、江戸時代の城絵図にみられる曲輪の原形が形成されたようです。

このように、沼地部分にも埋立て工事を行って曲輪を造成する場合があったことは確かなことです。けれども、それは台地上のみでは曲輪配置が不十分である場合のこと。ましてや、15世紀後半の一部の曲輪での造成工事が記憶されていて、それが岩槻城全体のことに拡大解釈された、とまではいえません。

もう一つ、整理しておく必要のあることがあります。それは、現在、岩槻城の中に「竹束曲輪」と呼ばれているところがあることです。そこは、本丸の北側、御茶屋曲輪の西南の小さな曲輪です。「竹束」は、岩槻城の別名の一つとも通じ、築城譚と密接な関わりがあるかのように思えます。しかも、江戸時代初期の岩槻城図には、この曲輪のところに「古本丸」との注記があって、江戸時代初期の人々は、ここを往時の本丸と捉えていたことがわかります（文献19）。前出の島田午蔵が大正期頃に謄写版で刊行した冊子『岩槻城趾』の中には、御茶屋曲輪にある「茶屋台」について、「太田氏ノ頃ニ用フ」と述べていて、近代に至るまで、この付近を戦国期岩槻城の痕跡をとどめるところとみる認識があったことがうかがわれます。この「竹束曲輪」から御茶屋曲輪は、本丸側に土塁が設けられていて、明らかに本丸よりも「奥」に位置付けられた曲輪です。そのような重要な曲輪が「竹束曲輪」と呼ばれていることには、深い意味があるように思えてしまうのです。

ところが、江戸時代の史料には「竹束曲輪」という名前の曲輪は見当たりません。この部分は、曲輪名が明記された各種の岩槻城図にみる限り、御茶屋曲輪の一部とされて

いました。では、何故、この部分が「竹束曲輪」と呼ばれるようになったかという点、1970年代以降の岩槻城の城郭史研究と文化財調査の過程で、この部分が「竹筵曲輪」と名付けられ、それが「竹束曲輪」に置き換わっていました（第13図、文献20・21）。

何故こうなったかという点、明治維新後に岩槻城が廃城となった後、主郭部とその周辺は



図11 岩槻城竹沢曲輪跡第1地点A区 沼地に造成された平場（右半分の縞模様）と堀（左）



図12 岩槻城竹沢曲輪跡第1地点A区 沼地に打ち込まれた杭列と横臥する木片

「竹筈曲輪」との小字が付けられました（これは恐らく、『岩槻巷談』の影響でしょう）。その後、「第3調査室 地形と地図」に配架した岩槻城跡詳細測量図（1973年測量）が作成される頃までには、御茶屋曲輪の一面がこの名で呼ばれるようになっていたようです。したがって、「竹束曲輪」という曲輪名は、江戸時代の岩槻城における名称ではなく、昭和の岩槻城調査・研究の中で近代地名を基に新設された名称であるといえてよいでしょう。

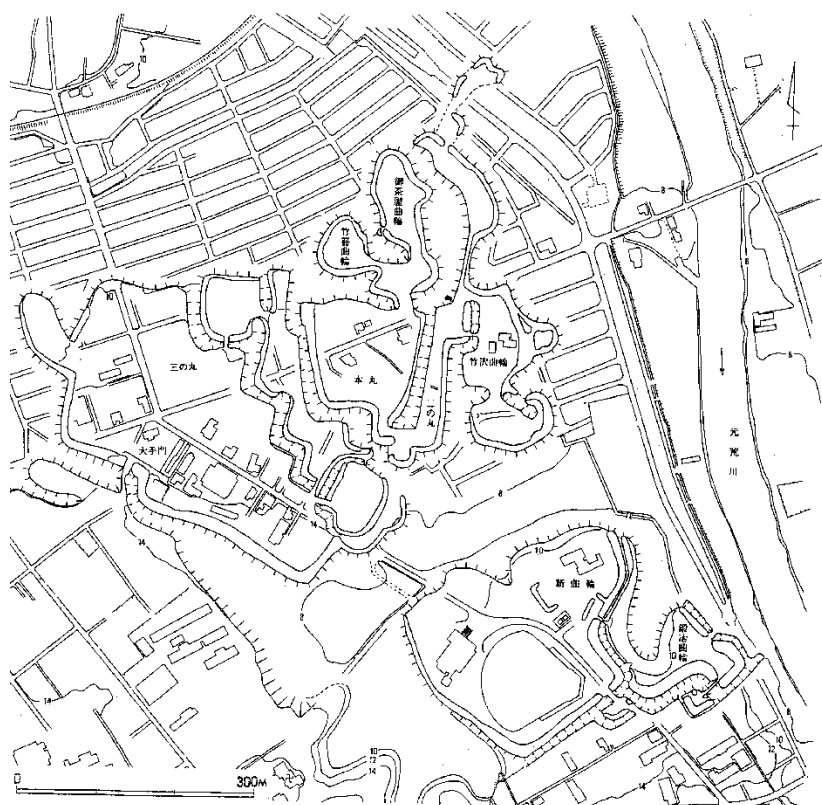


図13 『埼玉の中世城館跡』（文献21）に掲載された岩槻城復元図

もはや蛇足の話になりますが、もう一つ、整理しておいた方がよい点があります。それは、岩槻城の別名の一つ「竹束城」の問題です。実は、「竹束城」は、必ずしも不動の別名ではなかったかもしれないのです。冒頭で三つの別名として「白鶴城」・「浮城」・「竹束城」を掲げ、これらは『岩槻巷談』によって伝えられてきたと紹介しましたが、現在確認できている『岩槻巷談』のテキストである『埼玉叢書』第二巻掲載本文では確かに「竹束の城」と記されています。しかし、『岩槻巷談』に先行する作品と考えられる『老談岩槻軍記』と『老談岩槻聞記』では、異なる表記がされているのです（表3、図14・15）。

表3 「竹束城」の表記

| 史料 | 『岩槻巷談』 | 斎藤家本 『老談岩槻軍記』 | 青山根岸家本 『老談岩槻軍記』 | 個人蔵 『老談岩槻聞記』 | 参考 中村庄八家 | 参考 島田浮城「白鶴城物語稿」 |
|--------------|--------|------------------|----------------------|-----------------|-----------------|--------------------|
| 「竹束城」の記載 | 竹束の城 | 竹筈城 | 竹楯城 | 竹楯の城 | 竹束（の）城 | 竹筈の城 |
| 出典 （表記確認） | 『埼玉叢書』 | 『蓮田文化叢書』51 | 国立国会図書館 デジタルアーカイブ | 原本 | 『岩槻市史近世史料編Ⅳ（上）』 | 同著『岩槻誌』 |

「竹束」と「竹筈」は、漢字の使い方が大らかだった江戸時代では、大きな違いとはいえません。しかし、「竹束（筈）」と「竹楯」とでは、漢字表記にはとどまらない違いがあります。「竹束（筈）」はあくまでも素材・原材料のことであるのに対して、「竹楯」は防御施設ひいては城館そのものを含意しています。また、「竹束（筈）」は沼地埋立てのエピソードと直対しているのに対して、「竹楯」はそことの間に微妙なズレがあります。新しい段階の作品で

あることの明らかな『岩槻巷談』が「竹束の城」としていることから、「竹束」という表記が後出であることがわかります。この点で、「竹楯（の）城」という別名をエピソードに相即させるためにシンプル化して創出されたのが「竹束の城」であった可能性も想定することができます。

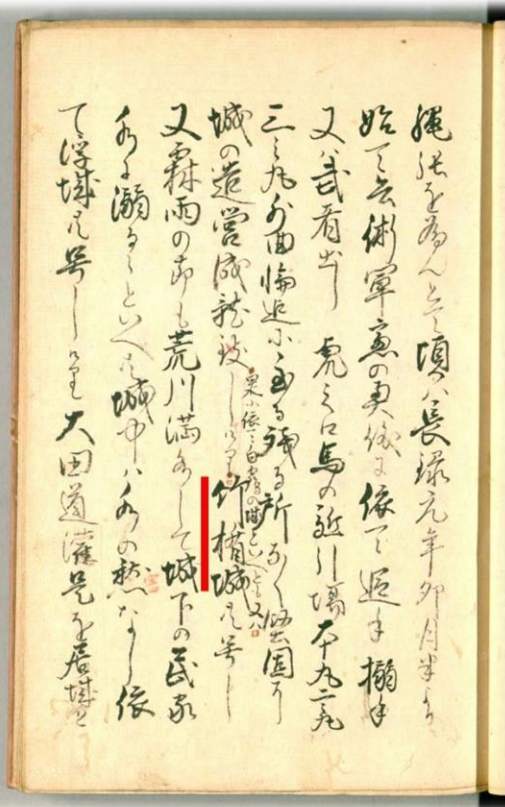


図 14 青山文庫本『老談岩槻軍記 一』
※国立国会図書館デジタルアーカイブ

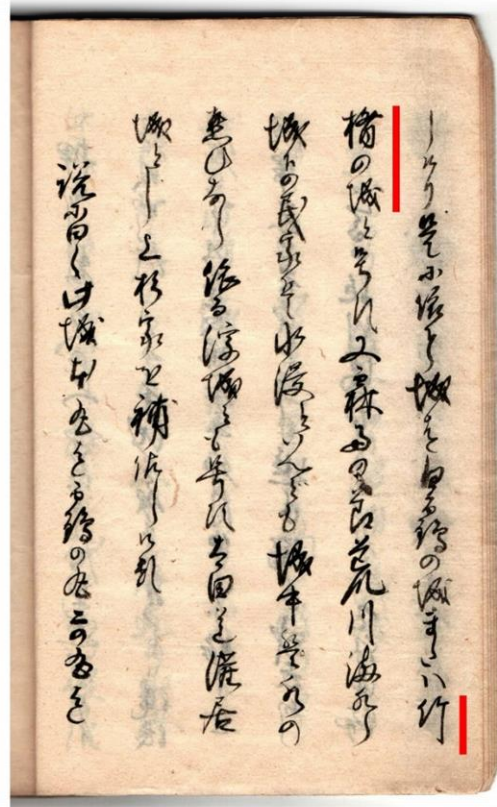


図 15 個人蔵『老談岩槻聞記 巻上』

確定的結論は『老談岩槻軍記』『老談岩槻聞記』それぞれの写本間の関係を精査した上で導くべきことであり、先にも紹介した、これらの作品群以外にもみられる「竹束（之）城」との影響関係も問い直してみる必要があるかもしれません。この作業は、築城「伝説」として紡がれた物語とその展開という、江戸時代後期における文芸活動の一端を跡付けることになるでしょう。

* * * * *

太田道灌の父・道真（どうしん）によって築城されたことが確実な川越城（かわごえじょう。川越市）にも、湿地への築城にまつわる伝説が伝えられていました（「川越築城の人柱」文献 22）。

・・・水田や底なしの淵により土塁の構築に難航していると、ある夜、夢枕にたった竜神から、どうしてもこの地に築城したいのならば、明朝、一番に道真のもとを訪れた者を人身御供に差し出せ、と言われた道真。通常、彼のもとに朝一番にやってくるのは愛犬だったことから、不憫に思いながらも、愛犬であればやむを得ないと意を決した道真

は、承知した旨を竜神に答えました。ところが、翌朝、一番に彼のもとを訪れたのは、なんと最愛の娘・世禰（よね）姫でした。驚愕する道真に姫は、昨夜竜神の夢を見て、自らが犠牲となると心に決めて、朝一番に道真のもとを訪れたのだといいます。こうして姫は竜神に身を捧げ、無事に川越城が築城されたのです・・・。

きっと竜神はこうなることをわかっていたんだろう、なんと非情な、なんと不条理な、などとも思えてしまいますが、それはさておき、今、城跡というと、深い緑に覆われて周囲の自然景観とも調和した景観がイメージされることも多いかと思います。しかし、高石垣が保存・整備された近世城郭がそうであるように、城として機能していた当時、城郭は自然地形を活かしながらも、そこに大土木工事の手を加え、自然的景観とは異質な、人工の一大構築物でした。沼地の中に忽然と姿を現す城郭は、まさに沼地を埋め立てて構築されたように受け止められる場合も多かったのかもしれませんが。

生半可なことではどうも築城できなかつただろう、という畏敬あるいは畏怖の念が、最愛の肉親を人身御供とする犠牲や人智の及ばぬ発想という筋立てで脚色され、時には伝説として、ときには物語として紡がれ、語り継がれてきたのでしょう。



図 16 『岩槻の伝説』に採録された「岩槻城築城の伝説」(文献 23)
 ※教育委員会文化財保護課窓口で有償頒布中。残部僅少。

おもな文献

- ・ 文献番号、執筆者、書名または論考名、(掲載書)、発行者、刊行年の順で紹介いたします。
- ・ 文献番号と書名を太字にしたものは、さいたま市立図書館が収蔵している図書です。所蔵館は、さいたま市図書館ホームページにて御確認ください。

- 1 稲村担元（編）『新訂増補埼玉叢書 第2巻』国書刊行会 1970年（初刊は1929年）
- 2 井門 寛「ミニ講座《軍記物の世界》 岩槻軍記」歴史研究会『歴史研究』第387号 1993年
- 3 青木文彦「『岩槻巷談』ノート」『岩槻史林』第21号・第22号合併号 岩槻地方史研究会 1994年
- 4 岩槻市立郷土資料館『企画展 地域の中の文芸史』 1998年
- 5 石井修次郎（編）『蓮田文化叢書 第51号』蓮田文化協会 1974年
- 6 中村家文書「村々申渡留帳」『岩槻市史 近世史料編Ⅳ 地方史料（上）』岩槻市 1982年
- 7 高橋家文書「武州岩附城主古来之次第」『岩槻市史 近世史料編Ⅳ 地方史料（上）』岩槻市 1982年
- 8 勝田家文書「岩槻城主覚書」『岩槻市史料 第十巻』岩槻市教育委員会社会教育課市史編さん係 1978年
- 9 峰岸純夫「かんはっしゅうこせんろく 関八州古戦録」国史大辞典編纂委員会編『国史大辞典 第三巻 か』吉川弘文館 1983年
- 10 中丸和伯（校注）『改訂 関八州古戦録』新人物往来社 1976年
- 11 岩槻市『岩槻市史 古代・中世史料編Ⅱ 岩付太田氏関係史料』 1983年
- 12 春日部市教育委員会『春日部市史 第三巻 近世史料編Ⅲノ二』春日部市 1982年
- 13 楠山春樹（編著）『新釈漢文大系 第62巻 淮南子（下）』明治書院 1988年
- 14 島田午蔵『岩槻誌』島田午蔵 1915年（1979年 大和学芸社より復刻）
- 15 岩槻市『岩槻市史 金石史料編Ⅱ 近世・近代・現代史料』 1984年
- 16 岩槻市教育委員会「太田氏と岩槻城について」『岩槻市史料 第4巻 講習会特集』岩槻市史編さん室 1975年
- 17 さいたま市教育委員会『岩槻城跡（御茶屋曲輪跡第1地点）発掘調査－遺構編－』さいたま市埋蔵文化財調査報告書第9集 2014年
- 18 さいたま市遺跡調査会『岩槻城竹沢曲輪跡（第1地点）・岩槻城二の丸跡（第5地点）』さいたま市遺跡調査会報告書第43集 2005年
- 19 個人所蔵「武州岩付御城図」 春日部市教育委員会『春日部市史 第六巻 通史編』春日部市 1994年 P423に写真掲載
- 20 柳田敏司ほか（編著）『日本城郭大系 第5巻 埼玉・東京』新人物往来社 1979年
- 21 埼玉県立歴史資料館『埼玉の中世城館跡』埼玉県教育委員会 1988年
- 22 葦塚一三郎『埼玉の伝説』関東図書 1955年
- 23 岩槻市教育委員会『岩槻の伝説』いわつき郷土文庫第2集 2002年